

プラハの冬のくらし

大槻 優子



朝やけの美しさにみとれて、最後の戸締り確認の緊張感から解放される一瞬がある。出勤、登校を急ぐ家人達が、順次街灯に照らされた歩道をバス停に向かった後のことである。時計は、七時をまわっている。ヴェランダの先に広がる緩やかな丘陵地帯と、空全体を覆う黒灰色の厚雲が一体となり、そのわずかに切れた細長いいくつかの層に、太陽の燃える証を見る。その色のコントラストは、朝のすがすがしさよりも、別世界をのぞき見した不気味さを感じさせるのだが、やはり美しい。暗闇の中

に朝を迎え、灰色雲の下に日中を過ごし、午後四時過ぎには急速に闇の世界に入っていくという毎日である。雲の向こうに、太陽の姿を見る日はもっと稀で、そんな時は、尊厳な感情が自然に湧いてくる。街灯の消えた灰色の町でながめる灰色の空、その空に浮かぶくすんだ赤色の玉を初めて見る人が、「あれは、なに？」と聞いたのを思い出す。

一言で言えば、プラハの冬は、暗い。

ここでも、一年の間には四季があり、暦の上での区分

は、日本と同様に春分・夏至・秋分・冬至でされている。にもかかわらず、くらしの上での区分とは、ずい分ずれている。春・夏・秋の季節を早足で過ごし、冬をゆっくり味わいつくらず感がある。十一月頃、寒気团から送られる強風で始まり、四月の冷たい雨降りまで続くのが一般的である。一年の半分は、冬のくらしになっている。

ブラハの冬は、長いのである。

この暗くて長い冬は、当然寒さを伴う。緯度が高く、また内陸の地を感じる寒さは、鋭く、厳しい。「寒さ」は、一瞬にして、「痛さ」に変わるといのが実感である。もっとも、日本の北陸地方や北海道には、的を得た美しい別の表現があるのかもしれない。凍てつくような寒さを毎年経験しながら、私は単純に「痛い」と感じてしまうのだが。

冬のくらしの基本は、まず防寒である。

道行く人々の服装に共通なのは、帽子、厚いコート、手袋、厚底のブーツである。もう少し注意深く観察すれ

ば、毛糸の帽子は二重編み、コートは表地と裏地の間の芯入り、手袋は裏毛付き、ブーツも裏毛張りであることに気付くはずである。また、多くの人々が毛皮、特に羊の毛皮を裏にして、表がスウェード、内が毛になった状態の毛皮を材料にした防寒具を身に付けているが、これは伝統性、経済性に基づく選択であって、動物虐待の見地から抗議される対象にはならないだろう。ちなみに、夫のコートは、二十五年間、私のものは十五年間着用し続けている代物である。成長の速い子ども達のための冬仕度は、親の一大行事である。九月の終わりには計画を立て、十月中には準備する必要がある。クリスマスプレゼントでは遅すぎる。乳母車の乳児は、コートの代わりに毛皮袋に入ることになる。これだけ整えてしまえば、外での活動が自由になる。モードやおしゃれは、次の段階の関心事である。東京周辺の冬の装いは、ブラハでの秋の装いと考えればわかりやすい。外気がコートの織り目を通して骨身にしみる経験をした時、初めて「寒さ」に対して謙虚になるようである。私のそれが、ブラハに

着いた年の十月十五日であったことは、今でも忘れられない。もっとも、実生活でのこれに類する失敗は、限りなくくり返された。特に公園や町中で、多くの母親達や保育者達が、小さな子ども達の帽子や手袋を忍耐強く、かぶせなおし、はめ直しているのを見る時、自然の厳しさに対して甘さの残る私自身の反省につながる。ここで防寒は、単に寒さを防ぐことではなく、生命を守ることと直結している。だから、「寒さに耐えよ」とは、誰も言わない。寒さを感じないように装う配慮をすることが先決なのである。

住まいの防寒は、その構造にもみられる。地下室、屋根裏部屋、二重窓、玄関先の軒下ホールが、「間」をつくり、住まいの空間が直接外気に触れないようになっていく。また、伝統的な家は、窓が小さく、暖房の経済性を考慮して、立方体の形をしている。住まいをいかに暖かく保つか、「住」の基本条件である。室内暖房ではなく、家全体を暖める中央暖房の方法を採っている場合が多い。暖房期間は、半年よりも長い。国公立の建物は、

暖房期間が定められているが、それによれば、十月一日から翌年の四月末日までの七ヵ月である。暖房センターを自主管理しているところでは、必要に応じて期間を変えており、開始時期を早め、終了時期を延期する場合が多いようである。また、個人住宅では、自動調節で室温を一定にしていると、夏でも暖房装置が機能するという。それだけ、住まいに暖房が欠かせないわけである。外の寒さを遮断し、部屋を暖めて、人々は快適に過ごす。家の中では、装いに季節感がない。私達は、公団のアパートに住んでいて、冬を半そで姿で過ごし、夏のあつた時、セーター、ズボン、厚靴下という奇妙な装いになることがある。寒さから身を守るのは、冬ばかりではない。

厳しい寒さの中での食料源は乏しい。伝統的な冬の食事は、夏に作っておいた果物や野外の保存食を中心にしたものである。食生活が改善されて、生の野菜や果物を多く摂るようになってきたが、大都市周辺の温室栽培物の他は、多くを輸入にたよっている。冬の間土壌は、地

下二メートル位まで凍るからだ。それで、栽培は不可能だが、細菌撲滅に役立っているという話を聞いた。エネルギー補充のための油、甘味を多く含む食品や調理法の問題も指摘されている。日本人である私は、他人事のようを考えていたが、知らぬ間に渦中にあり、つまりは年間を通しての食改善の注意を受けた。

冬のくらしの衣食住が整うと、身の回りに活気あふれるプログラムが豊富に見えてくる。

寒いから室内で過ごすと考える人はいない。戸外の空気に触れるのが、健康法の基本である。「どんな日にも、雨、風、雪にかかわらず、午前二時間、午後二時間の散歩を欠かしませんでした。」と老婦人が言う。自分一人の散歩でない。孫との散歩である。乳児の時は、毛皮袋に入れて乳母車に乗せ、歩くようになれば歩かせて、戸外に出す。マイナス二〇度の日も、鼻から下にガーゼをかけたたり、マフラーで覆ったりして、直接外気に当たらないよう気をつける。然し室内に入れておくというようなことはしない。私は、雪の積もった凍った道

がこわくて、娘の眠る乳母車をバルコニーに出し、ヨチヨチ歩きの息子を連れて外に出たこともあったのだが、そんな時、この老婦人の自信に満ちた声が耳に聞こえて、身のすくむ思いをしたものである。二人の子供達が、自分の足で歩き始め、外に出たがるようになってからは、本当に毎日風雨に負けず、森を歩きまわり、そり遊びに夢中になった。幼稚園の子ども達も、年間通して外の散歩が日課になっている。

外の空気を吸う、散歩をするだけでなく、もっと自由に身体を動かし、冬のスポーツを楽しむようになれば、暗くて寒くて長い冬も苦にならない。そり、スキー、スケート、アイスホッケー、にどれも身近にできるスポーツである。

私の住むアパートの前は、学校の運動場で、そのアスファルトにした部分は、冬の間、凍る期間、スケート場になる。学校の用務員さんは、夜十時頃になるとそこにホースで水をまき、スケートリンクをつくる。体育の時間には、スケート、アイスホッケーになるし、放課後は、

自由に滑る子達で、一杯になる。暗くなると、脇の体育館の壁に取り付けられた夜間照明が付いて、今度は勉強を終えた大きな子達がアイスホッケーに興じることになる。感心なのは、必ず数人の大人がいて見ていることである。我が子の指導が主目的かもしれないが、全体を見ることにもなり、時々注意の鋭い声が飛んでくる。

土、日ともなれば私の住む丘の下の大きな池には、アイスホッケー場がいくつもあるし、ゴトゴトした自然の氷の上を巧みに滑る子供達や親達も多い。人数のそろわない家族アイスホッケーで、私も得点を入れた経験者になった。

町中には、「冬のスタジアム」がいくつもあり、アイスホッケー場が解放されて自由に滑るようになっていくが、私は仲間入りできない。巧みな身のこなしと超スピードであふれ、私には単に無秩序に見えて、恐ろしい。どの人も、魔法びん、軽食持参で楽しんでいる。ここは、スポーツをする所であって、娯楽施設ではないのである。靴は持参、入場料を払ってロッカーの鍵をもら

うだけである。売店もなければ、サービスもない。時間を惜しんで、ひたすら滑り楽しむだけである。

雪が降れば、スキー。プラハ周辺の公園、丘陵地帯は、ノルディック・スキーをする人達で一杯になる。夏の間、自転車乗りを楽しんだコースは、そのまま冬には、スキーの遠足コースになるという具合である。その途中の斜面が、小さな子ども達のそり遊びやスキー練習場になるのは勿論である。

プラハの子ども達の冬休みは、日本の子ども達と同様、クリスマスから新年にかけての二週間である。春休みは、二月末一週間か三月初めの一週間である。プラハ一区と五区、六区と十区とで、二つの期間を毎年交代で分け合う。冬の間の「春休み」というのも奇妙だが、雪のたっぷりある間のリクレイションという意図も察せられる。年休を取った両親と山ごもり、あるいはスキーキャンプ参加を楽しむケースが多い。

冬の間の文化的なプログラムも多彩である。日毎に変わる演奏会場や劇場の出し物の横で、ダンスパー

ティ、カーニヴァルの企画が豊富である。私個人は、子ども達との生活が中心で、大人のそうした社交の場に出たことはないのだが、毎年の楽しみにしている人々も多い。子ども達のカーニヴァルもさかんである。それぞれ趣向をこらした仮装で、にぎやかに楽しむ。クラスで勢揃いした写真を見る時、ファンタジーの世界の満足気な主人公達の背後に、そのアイデアと技術を読み取ろうとする意識が今でもふと働いてしまうのは、子ども達のイメージを具現するのに悩む経験をしたせいだろう。

暗くて寒く、長いブラハの冬を、人々は積極的に明る

く楽しくくらす。その知恵とエネルギーには、感心してしまう。敵しい自然条件に頭を下げる忍耐強さばかりではない。それにもかかわらず、人々に共通している願いは、春の到来を待つこと、太陽の輝きの中に身を置くことである。太陽が雲の切れ間に現れると、人々は足をとめ、コートのボタンをはずす。それから顔を太陽に向けて目をつぶったまま、じっと佇んでいる。こうした光景もまた、ブラハの冬のくらしの一つである。

(ブラハ在住)

言語障害の臨床研究ノート(6) 終章

国際化のうねりの中で

村上 敏子